山本五十六記念館

高野季八宛（1899年）

五十六はこの手書きの手紙の中で、当時東京の上野に住んでいて歯科医を目指して勉強していた兄季八に、最近の修学旅行の話をしています。

中学時代の同級生2人と「米山」と呼ばれる山に登ったことや、登山中に遭遇した巨人から身を隠したことなどを冗談交じりに語っている。

手紙を見ると、五十六のユーモアのセンスの良さと、普通の十代の若者とは思えない文章力が伝わってきます。また、弟との絆の深さを感じている様子が伝わってきます。旅は楽しかったが、喜八と一緒に上野で勉強したいと寂しく嘆いています。

五十六の誕生

五十六は、長岡の地で長い歴史を持ち武士の血を引く高野家に生まれました。

高野栄軒（本名：高野永貞 1693-1773）と息子の余慶（本名：常道 1729-1815）が祖先で、2人共越後長岡藩士でした。

祖父・父・兄二人が戊辰戦争(1868-1869)に参加しました。

しかし、高野家は軍人としての名誉に加えて、数代に渡って詩や作家であることでも知られていました。

この銘には「一生において、何事も人生は短い *In all, life is short*」と書かれています。

五十六が中学1年生のときの書いた長作文「迎明治30年」より。

フランクリン自叙伝

五十六が中学生の頃、このベンジャミン・フランクリンの自叙伝のコピーを手に入れました。彼は、植民地の抑圧者からアメリカ人を解放するために闘争したフランクリンを大いに賞賛しました。彼はフランクリンを見習って、いつか偉大な指導者になりたいと思っていました。

五十六の中学時代のノート

五十六がベンジャミン・フランクリンに憧れていたことは、中学3年生の16歳の時のノートにも表れています。ノートにはフランクリンの名前が漢字で書かれています。

五十六の生家

高野家の住宅はもともと長岡城の隣にあったが、戊辰戦争で焼失しました。戦後、一家は床面積約1320平方メートルの木造住宅を新築しました。これは現代の日本の住宅基準では大きいですが、社会的地位のある家族にとっては比較的小規模なものだったろう。

五十六はこの新しい家の一階で生まれました。その後、同じ階の一部が勉強部屋として使われてい

ました。

養子

五十六は、1916年、長岡の元武士であった山本家に養子に出されました。当時の日本では、男性の相続人がいない家庭では、将来性のある若者を養子にするのが一般的でした。山本家はこの早い段階でも、五十六の可能性を見抜くことができた。

「常に戦場で」をモットーに

常在戦場（常に戦場に在る心を持つ）。明治時代（1868–1912）の長岡藩主であった、牧野家の標語です。初代牧野とその家来たちは、厳しい修行体系を確立し、それは何世紀にもわたって続いていました。必要な時にはいつでも領地を守りました。

平時、牧野家に仕えていた人たちは、健康を維持し、お金を貯め、常に戦闘態勢を整えておくことが奨励されていました。この哲学は五十六も信じ、日々の生活の中で守ろうとしていました。

世界を巡る旅人

これは1926年4月の葉書で、五十六は兄の喜八に最近の旅を報告しています。

この頃、五十六は合計9ヶ月間、アメリカ大陸とヨーロッパを旅していました。

海外にいた際、高度な技術への理解を深め、今後、航空と石油が国際発展の重要な原動力となることを実感しました。文中に「石油施設の視察でメキシコに行く」と一文書かれています。

世界からのポストカード

旅の途中、五十六は家族や仲間は何枚もの葉書を送りました。その中には、昔の恩師であった渡部興、兄の喜八に送った絵葉書も含まれています。

ハーバード大学で英語を学んだことや、ワシントンの日本大使館での仕事のことなどを語っています。また、ワシントン海軍軍縮条約交渉の一員として、海軍大将の井出謙治と一緒に旅をしたことにも触れている。

アメリカに滞在

1919年5月、五十六は渡米し、ボストンに一時滞在した。彼はハーバード大学で英語を学び、夕方には追加の個別指導でレッスンを強化しました。

その年の12月には海軍中佐に昇進しました。その後、1920年5月には、ワシントンD.C.の日本大使館で海軍駐在武官として勤務を開始しました。

間もなく、日本の幣原喜重郎大使の国際通信会議の準備を手伝うことになりました。五十六は、欧米に追いつくためには日本の技術を近代化する必要があると考えていました。彼はこの任務を、偉大な名誉であると同時に、祖国の将来にとって重要な任務の一つであると考えました。

1926年に任期が終了すると、五十六は自費でメキシコに赴き、油田視察するなど、国際的な石油ビジネスの知識を深めました。

西山伊豆子宛（1919年）

五十六は、アメリカ滞在中に、故郷の友人の姪で14歳の西山伊豆子に宛てて手紙を送りました。手紙の中で彼は、独立心の強いアメリカ人女性のライフスタイルと、個人的な野望よりも家族の維持を優先する傾向のある日本人女性のライフスタイルを対比させています。

彼は伊豆子に、高い志と社会の期待とのバランスをとるように促しました。彼は、日本の将来の繁栄の鍵は家庭の調和にあると信じていましたが、同時に女性が自分の可能性に気づくことを奨励すべきだとも考えていました。

誠意と慈愛

五十六は慈善の心が強く、自分にとって大切な人を支援するために、しばしば自分の道を踏み外していました。師匠の妻である渡部興喜子(*Watabe Yokiko*)に宛てた1940年の手紙の中で、彼は次のように宣言しています。「恩師に仕え、尊敬し、恩師が与えてくれた50年に報いよう」

トランプ

五十六はトランプのブリッジから、麻雀やルーレットのような運が左右するゲーム、将棋（日本版のチェス）のようなその他のゲームまで、あらゆる種類のゲームを愛していました。彼にとって、これらのゲームは単なる娯楽以上のものだった。それは、戦場での心を鍛えるという重要な役割も果たしていました。ゲームをする事で重要な教訓が得られたと彼は言っています。

まず第一に、勝っても負けても、常に冷静さを保ち、明確な判断力を発揮しなければならないと信じていました。第二に、辛抱強くしなくてはならないが、相手を倒す機会が生じたときは、ためらうことなく迅速にそれを行う必要がある。第三に、勝つためには、大胆さと慎重さのバランスをとる必要がある。しかし、五十六は時には自己犠牲も必要だと反省し、次のように述べています。「自分の利益のためだけに行動しては、常に正確な判断はできない」

平和を求めて

山本五十六は、1940年に日本がドイツ、イタリアと三国同盟を結んだのは間違いだったと考えていました。彼はこの行動に強く反対し、日本が以前のワシントン海軍軍縮条約を弾劾するのを防ぐ為にできる限りの事をした。艦船ではなく航空機こそが国軍の未来であると感じていた。彼は、日本の指導者たちは、海外での侵略行為に関与するのではなく、国家安全保障の維持に焦点を当てるべきだと考え続けていた。

高野季八宛（1927年）

1927年に五十六が兄に宛てたこの手紙の中で、日本が直面している多くの地政学的課題について

て懸念を表明しています。彼は昭和金融恐慌、日本政府の最近の内閣改造、そして中国の山東省で進行中の日本の軍事作戦についてコメントしています。

彼は、これから開催されるジュネーブ軍縮会議を非常に重視していました。

五十六は、この会議を日本が平和を達成し、世界の緊張の高まりを鎮めるための最良のチャンスだと考えました。

ロンドン海軍軍縮会議に出席

1930年、五十六はロンドン海軍軍縮会議の日本代表団の一員として出席しました。他に出席した著名な代表団のメンバー（財部彪、松平恒雄、永井松三、安保清種、左近司政三、山口多聞など）と一緒に写真に写っています。

会議では、五十六はイギリス代表団のロバート・クレイギー卿と緊密に協力し、親交を深めました。後に駐日英国大使となるクレイギーは、五十六とその交渉力を高く評価していました。

第二回ロンドン軍縮会議

山本五十六は第二回ロンドン海軍軍縮会議の予備交渉の1934年の時に、兄の喜八に宛てた手紙を書いています。五十六は、1930年の会議で印象的な活躍を見せた後、松平恒雄英国大使とともに日本代表として再び活躍する機会を得ました。改めて、この手紙のトーンを見ると、五十六が日本の将来にとって、これらの会談がいかに重要であると考えているかがわかります。彼は、自分がどれだけ懸命に交渉していたかが強調されています。

海軍昇格と航空機の重要性

五十六は、第二回ロンドン海軍軍縮会議の予備交渉を終え、1935年初頭に帰国した。彼は日本海軍航空部長に昇進し、すぐに日本の軍事戦略の改革に乗り出しました。彼の確固たる信念は「国防の主力は航空機である。船は援助を提供するためだけに存在する」というものでした。

後に海軍次官となりました。

1939年、山本は母校である長岡中学校の生徒たちに講演を行った。そこでは、改めて航空機の重要性を強調し、学生たちがより平和な未来を見られるようにとの願いを込めました。

船員の追悼

五十六は常に部下を大切にしていました。この記念帖は、航空母艦「赤城」の船長在任中に神社から取られたものです。

当時、海軍航空隊は来るべき紛争に備えて厳しい訓練を行っており、事故で命を落とした軍団員もいました。五十六は、自分の将校には、亡くなった仲間に敬意を表する時間が必要だと考えていました。

六千年の歴史のノート

このメモでは、五十六が日本の古代史を簡単にまとめています。彼は、神々の伝説、日本とのつながり、そして現代世界における神々の居場所を語り継いでいる。

このメモを見ると、五十六は科学的・文化的に進歩的であっただけでなく、日本文化の神聖で神話的な側面を大いに尊重していたことがわかります。

聖書

五十六は中学生の頃、ニューウェルというキリスト教の牧師から野球を教えてもらい、その影響を受けていました。五十六は生涯を通じて宗教に強い関心を持ち、この聖書を読み、数多くの仏教や神道に関する書物を読んでいました。

ドイツとの条約に断固反対

五十六は、個人的な脅迫や同僚からの軽蔑にさらされながらも、ドイツとの日本の同盟に断固として反対し続けました。1939年5月31日頃に書かれたこの声明では、ナチス・ドイツとの同盟は米英との戦争を招き、日本の破滅につながるとの考えを改めて表明しています。五十六がこれらの国で過ごした時間は、他の日本の指導者に欠けていた国民の精神性を見抜いていたのかもしれない。

連合艦隊司令長官

五十六は、アメリカで過ごした経験から、アメリカ人の軍事力と強い意志をよく知っていました。しかし、1941年5月に書かれた渡部重徳宛の手紙には、一日も早い平和の実現への希望が込められている。彼は、日本は「この大激流を乗り越えて生き残らなければならない」と言っています。

軍艦長門の連合艦隊司令長官

就役当時、長門は世界最大の戦艦でした。また、世界で初めて40cm砲を搭載した戦艦でした。さらに大きくて有名な武蔵や大和は数年後に就役しました。

真珠湾攻撃前最終作戦会議の記念写真

1941年11月13日から14日にかけて、西日本の山口県にある岩国海軍基地に、日本海軍山本五十六司令長官と参謀長ら、そして大部分の艦隊が集結しました。

ここで真珠湾爆撃計画の最終修正が行われました。五十六は、最後の最後まで、アメリカとの和平交渉が実現することを願っていた。彼は、たとえ攻撃部隊がすでに真珠湾に接近していたとしても、そのような和平交渉が成立した場合には、攻撃を中止するように命じた。

茶器の贈り物

山本五十六は、戦前・戦後の日本を代表する実業家・藤原銀次郎にこの儀礼茶器を贈りました。終戦の際、銀次郎をはじめとする五十六の仲間たちは、彼の思い出を称えるためにこの茶器を使っていました。

持ち運び可能な茶器

この持ち運びができる茶器は「*Kachidoki*（勝利の叫び）」と名付けられています。持ち運びに便利な茶器は、戦場でも伝統的な和のスタイルでお茶を楽しめるように作られました。セットの各道具は、戦う男にふさわしい、戦争、長寿、勝利の運勢を象徴するものとして選ばれています。終戦後、山本家が記念品として保管していた。

五十六の短刀

太平洋戦争開戦直後に天皇陛下のご依頼で製作され、最も信頼のおける部下や顧問の方々に献上された短刀が10本ほどあります。現在の短刀もその一つです。刃先が丸みを帯びた8インチの直刃を採用しています。この短刀は五十六のものでした。五十六の長男の山本義正より寄贈されました。

短刀の鍛造は、主に一貫斎繁正（1905～1995年、本名：酒井寛）と遠藤光起（1904～1992年）の二人によって作られました。本刀は、新潟市在住の遠藤光起（1904～1922）によって作られました。刀身に彫られた文字は、新潟県三条市在住の阿部昭忠（1899-1977）の手によるものです。表には「皇国興廃（大日本帝国の興亡）」、裏には「繫在此征戦（軍事遠征によるもの）」と書かれています。

戦場での使用を目的としたものではありませんが、これらの短い剣は、幸運にもそれらを運ぶことができる人々の士気を鼓舞しました。

鍔は純銀製で、彫刻が施されています。表には「御賜（皇剣）」、裏には「頒（拝呈）」の文字が刻まれています。

1942年11月12日海軍中央部宛

1942年8月7日、アメリカ軍は南太平洋のガダルカナル島を指揮し、そこに拠点を置く日本軍の飛行場も含めて指揮を執りました。日本の指導者たちは、この島が戦略的に重要であり、太平洋戦争に勝つためには、島の奪還が不可欠だと考えていた。

しかし、3度の勇敢な試みにもかかわらず、彼らは島を取り戻すことができませんでした。五十六は、彼の断固とした努力にもかかわらず、島はアメリカの支配下に留まった事を海軍司令部長である三和義勇にこの手紙を書かざるを得なかった。

棚野透宛の個人的な手紙

五十六は死のわずか3ヶ月前に書かれた1943年1月の手紙の中で、戦争が長引き、日本の見通しがますます暗くなる中で、戦争に対する不安や心配が大きくなっていることを率直に語っている。家族のこと、故郷のこと、戦争が終わったら長岡はどうなるのかを心配していた。地元の長岡の方言を使って書いた数少ない例の一つです。

日本航空学会誌

五十六は、その生涯と海軍でのキャリアを通じて、飛行機に魅了され続けました。彼は航空が未来の道だと信じていました。あまり知られていないのは、彼もまた地理を深く愛していたということかもしれません。アメリカで発行されていたナショナルジオグラフィックの読者であり、より広い世界とそのレイアウトについて常に学ぶことに努めていました。さらに、五十六は当時の日本航空学会誌を購読して、最新の航空事情を常に把握していました。

米内光政書

「大国であっても、好戦的であれば没落し、平和の下では戦争を忘れれば破滅する」

米内光政（1880-1948）の書で、友人の山本五十六への最後の賛辞として詠まれたものです。米内は海軍大将、海軍大臣を経て、1940年に日本の総理大臣に就任しました。岩手県出身で、山本五十六の長年の友人であり、政治的にも盟友でありました。

米内の海軍大臣在任期間は、五十六の海軍副長官在任期間と重なります。日本がドイツ、イタリアとの三国同盟に入るのを阻止しようとして、1937年2月から2年7ヶ月間、力を合わせました。しかし、彼らが持ち場を離れた後すぐに、この協定はあっさりとは結ばれました。